

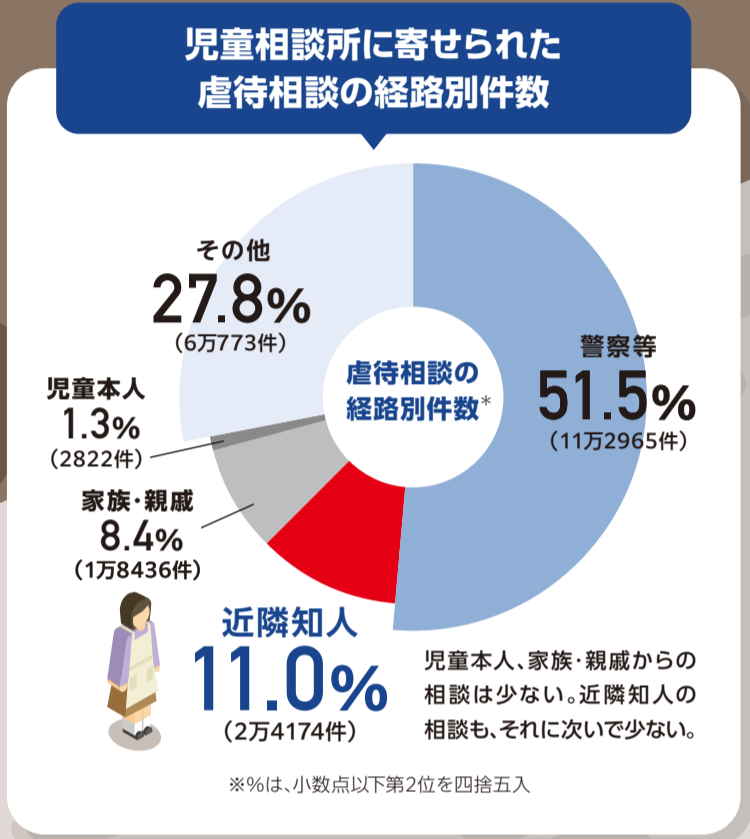
赤十字NEWS 11

Japanese Red Cross Society NEWS

NOVEMBER.2023.#1002

11月は
児童虐待
防止の
啓発月間

SOSに気がついて!



虐待相談対応件数と児童相談所数



*出典:「令和4年度児童虐待相談対応件数」(こども家庭庁ホームページ) (参照 令和5年10月23日)

特集 ▶ P.2

「小児虐待対応シミュレーション」に懸ける病院職員の思い 「虐待」の芽を見逃さない

TOPICS

保健分野の人道支援研修「H.E.L.P. in TOKYO 2023」開催
武力紛争や大規模災害に苦しむ
ウクライナ、トルコ、シリアからも参加

関東大震災から100年、「温故備震」企画展
天皇后両陛下、ご家族でご見学 P. 4-5

連載

国内災害救護 まるわかり辞典 P. 4

輸血なるほどヒストリー P. 5

AREA NEWS

[千葉] JRCがベトナムと国際交流
語学奉仕団のサポートも

[神奈川] 地震に備え、大規模防災訓練に
赤十字救護班と奉仕団員が参加

[静岡] 「海の豊かさを守ろう」SDGsの学びを生かして
JRCと奉仕団が海岸の清掃活動実施

／他 P. 6-7

WORLD NEWS

モロッコ、リビアを立て続けに襲った大規模災害
..... P. 8

プレゼント!

3名様

A賞 日赤の車載用
防災セット

B賞 2024年版
赤十字手帳&
赤十字カレンダー 10名様

詳しくはP.7をCheck! ▶

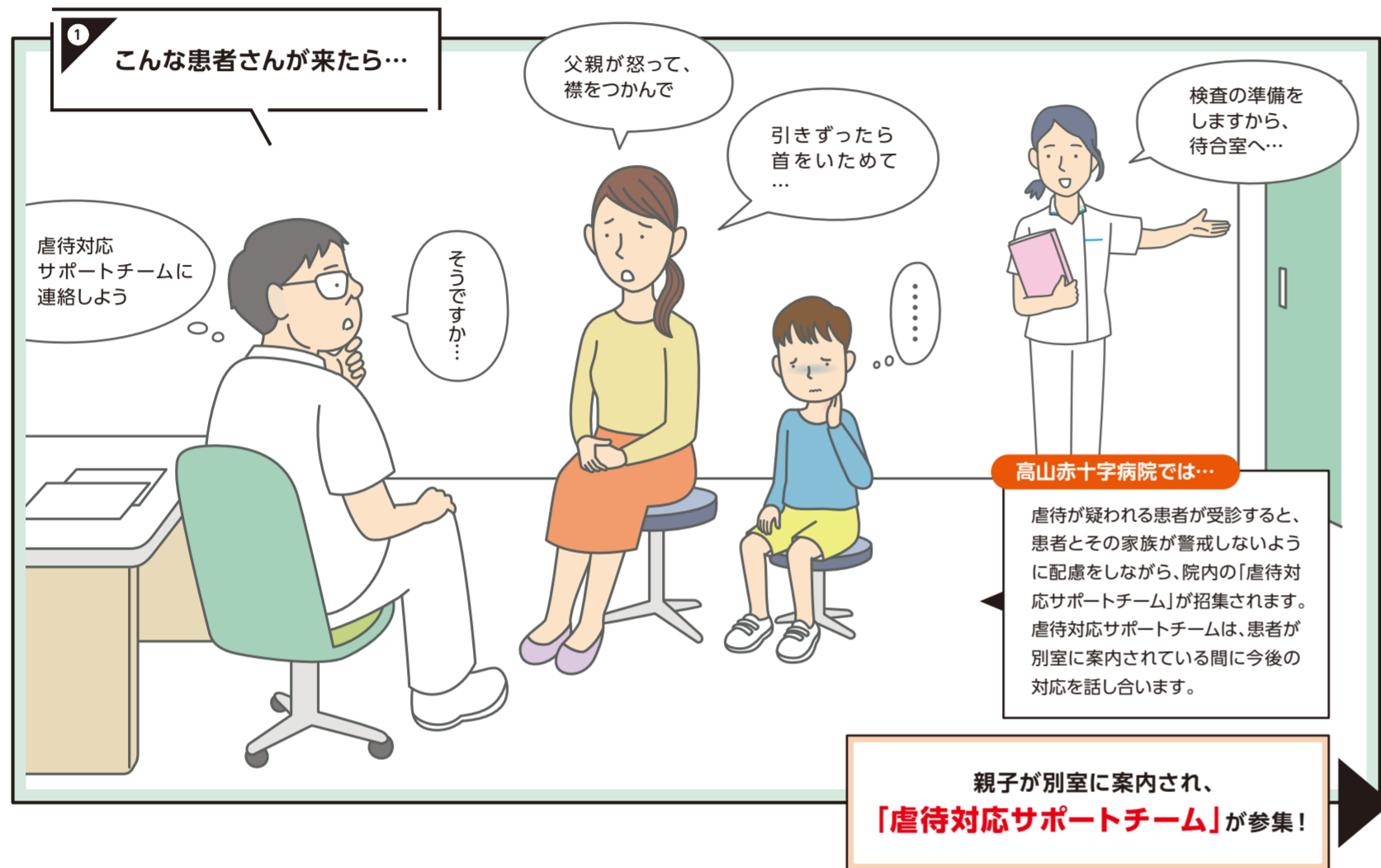


人間を救うのは、人間だ。

特集 「虐待」の芽を見逃さない

毎年11月は、国が定める児童虐待防止推進キャンペーン期間です。今回は、虐待の芽を摘むために高山赤十字病院が行っている取り組みを紹介します。声を上げられずにいる子どもたちのために、社会全体が気づきの感度を高め、主体的に取り組むことが大切です。

FEATURE SPECIALS



高山赤十字病院 副院長 兼 第一小児科部長 山岸 篤至 医師

Profile やまぎし・あつし ●地域小児科学、発達障害、小児神経学、小児保健などを専門とする小児科医。院内のみならず、飛脚地域の小児医療の担い手として、幅広く活動する。

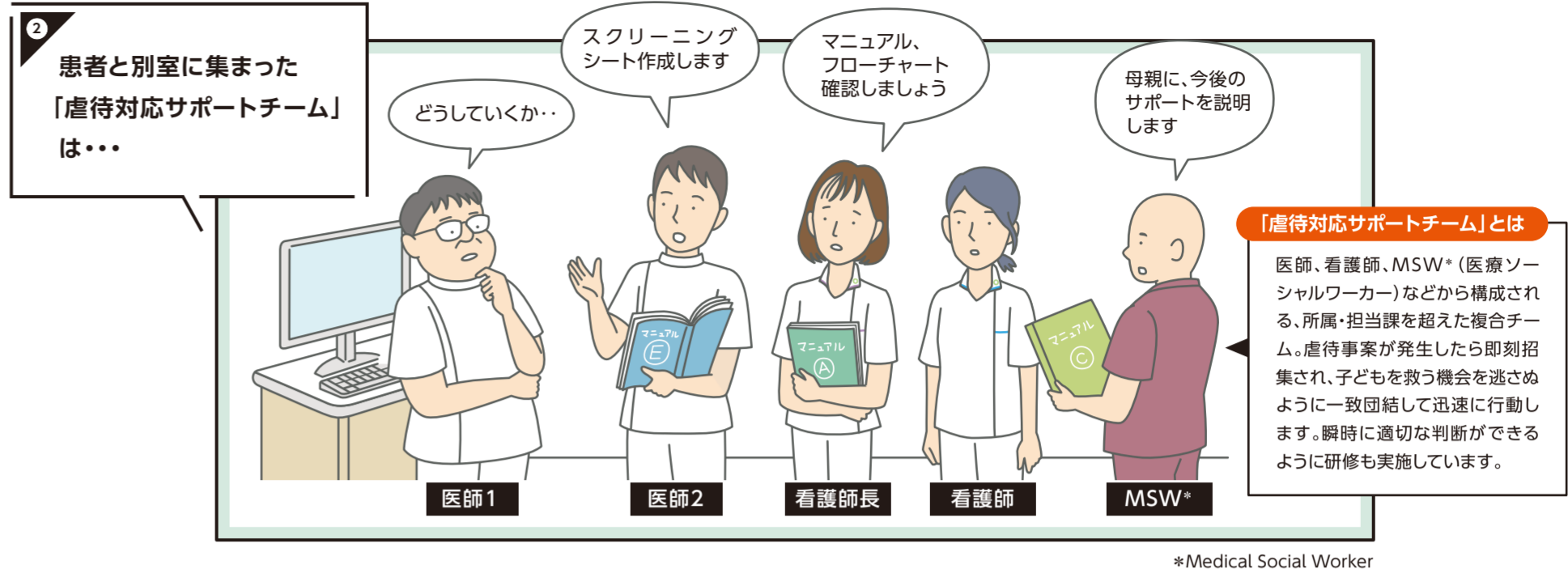
小児科医はいつでも子どもの味方。でも、親の側にも「なぜ虐待したのか？」という視点で手を差し伸べます

虐待を防ぐためには、なるべく早くその“芽”に気づくことが大切です。多くの場合、子どもは直接的なSOSを出せません。ましてや、親が同席している診察室ではなおさらです。ですから、少しでも「怪しいな」と思う点があれば、それを見過ごさないようにしなければなりません。過去のカルテを見直したり、時にはお子さんだけ別室で状況を聞いたりし、虐待の疑いがある場合は「虐待対応サポートチーム」を招集します。こうした、虐待が起きている、あるいはその疑いがある家庭のちょっとした違和感、保育園や学校の先生が気づくケースが多いです。しかし、その見守りの目から漏れてしまう場合もあるので、地域に暮らす誰もが気づき、気づいたら児童相談所など自治体の機関に報告できる、そんな社会であってほしい。たとえそれが勘違いであってもいいのです。とにかく、「あれ？ もしかして…」と思ったら、自治体や児童相談所へ連絡してください。

児童虐待に向き合う中で、最近私が問題に感じているのは、SNSなどを通じて虐待をした親への誹謗中傷が広まることです。地域

の中で「虐待があったようだ」と、その親の情報がSNSで拡散されることがあります。多くの人は、それが起きてしまった構造を理解せずに親だけを叩いてしまう。そうすると、その親は、私たちや児童相談所などの外部からのサポートを拒絶し、子どもを救いづらくしてしまうのです。

実は、虐待する親も苦しみを抱えている場合があります。自身も幼少期に虐待を受けて育った“虐待サバイバー”であったり、国際結婚のような場合は文化の違いで、自分の行為が虐待であることに気づけなかったり、あるいは、親が発達障害を持っているなど、親自身がどうすることもできない困難を抱えていることも…。小児科医はいつでも子どもの味方で、子どもを守ることが第一ですが、親が置いてきぼりにならないように注意を払います。親が孤立してしまうと、本当の意味で子どもを救うことができません。私たちのような専門職の人間だけでなく、社会として子どもと親を見守り、取り巻く環境などを理解し、全体図を捉えてサポートすることが、虐待の芽を摘み、子どもを救うために必要不可欠だと考えています。



「小児虐待対応シミュレーション」とは？

高山赤十字病院が独自に取り組む児童虐待防止のための研修プログラム。あらゆる場面を想定して台本を作成し、ロールプレイを行う(左ページのイラストは、ロールプレイのセリフの一部をイラスト化したもの)。研修参加者は子ども役、両親役、医療スタッフ役などを演じ、「子どもがどのようにSOSを出すのか」「それを察知した際の対応は？」といったシミュレーションを行います。院内職員だけでなく、外部の児童相談所スタッフなども参加し、虐待のリスク感度を高めることを目的としています。



ロールプレイの様子



研修に参加するスタッフの打ち合わせ

Voice 患者と地域(行政)をつなぐソーシャルワーカーの声

「あなたも辛かったと思う。一緒に考えよう」 子どもを救うために、親の敵にならない

医療機関では、例えば頭部の外傷など子どもの命に関わる場合は、すぐに児童相談所と警察に連絡する役目があります。このとき、MSWが親に説明することもあります。「あなたは嫌かもしれないけれど、皆で解決するために公的な力を借ります」と伝えます。大切なのは、虐待する親の敵になるのではなく、一緒に話し合い、考える姿勢です。「子どものために」何ができるか、ご両親やご家族だけでなくみんなで考えてみませんか？そのように投げかけるようにしています。そうすることで、親子を支援していく児童相談所などと連携や支援がしやすくなります。

相手を否定したり、攻撃するのではなく「あなたも辛かったと思う。一緒に考えよう」というのが、高山赤十字

病院の姿勢です。病院は医療機関なので、“点”でしか関わられませんが、学校や児童相談所、自治体とのつなぎ手となり、親子の支援に協力しています。

虐待にもさまざまなタイプがあり、親が自覚なく虐待している場合もあります。私が出会った事例では、口から固形の食事が飲み込めない障害児の家庭で、自然派志向の強い親御さんのこだわりによって、子どもが栄養失調になったケース。悪気はなくても、子どもの命を脅かしていたら虐待です。この場合も親と目線を合わせて根気よく話し合い、子どもの栄養状態を回復させました。

無関心は人道の敵、という言葉があります。「親が良いと言っている」「私は関係ない」という姿勢だと苦しんでいる子どもを救えません。より多くの人が、身近な子どもに関心を持ち、何か気づいたら手を差し伸べる、そういう社会になることを願っています。



高山赤十字病院 医療ソーシャルワーカー(MSW) 小邑 昌久さん

Profile こむら・まさひさ ●虐待対応サポートチームの一員として、「小児虐待対応シミュレーション」などの研修を中心となって進める。ロールプレイの台本作成にも関わった。また、地域の児童相談所や行政と、小児やその家族ごとに必要な支援の調整役も担う。

Voice 虐待にどう向き合う？看護師の声



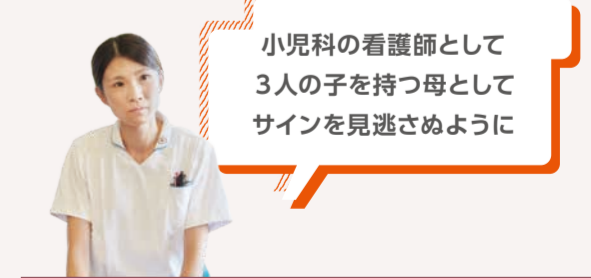
看護師長 城下 佳代さん

病院では虐待のさまざまなケースに直面する可能性があります。母親と子が入院していて、虐待する親族が押しかけてくることも。虐待の事案に対応したことがない職員でも、研修を通して事例を知り、「小児虐待対応シミュレーション」で対応力を育てることは、現場の備えとして有効ですし、小児やその家族が発する信号をキャッチする感度を高めることにもつながります。



看護師 袖原 真奈美さん

研修を受ける前のこと。休日の救急外来に「一時、意識を喪失した」と2歳の男児が連れて来られました。しかし、来院時は元気だったので診察がすぐに終了。ただスタッフ間で、男児の体が清潔でない様子や母親の無関心さが気になり…。休日明けにMSWに相談すると過去のカルテから虐待の懸念で市の介入があった家族と判明。「一歩間違えば…」と強く感じ、研修を受けました。



看護師 上林 実紀さん

煙草による火傷の手当てを受ける子が、なぜ火傷を負ったか聞いても「分からない」と答える。近い年齢の子の母親として、分からないのではない、言えないのだ、と感じました。子は親をかばいます。私自身、子育てにも追われ、時には心のゆとりがなくなり、反省すること。子どもを守ることが最優先ですが、親御さんにも、必要なサポートをしていきたいと思っています。

T O P I C S



1 TOPICS

保健分野の人道支援研修「H.E.L.P. in TOKYO 2023」開催 武力紛争や大規模災害に苦しむ ウクライナ、トルコ、シリアからも参加

日本のみなさんへ
参加者からメッセージ

9月4日～15日に、東京の日本赤十字看護大学・広尾キャンパスで、保健分野における人道支援研修「H.E.L.P. in Tokyo 2023」が開催されました。「H.E.L.P. (Health Emergency in Large Populations)」は、1986年に赤十字国際委員会が世界保健機関(WHO)、ジュネーブ大学と連携してスタートした、学術・研究機関と人道支援の現場をつなぐことを目指す研修です。武力紛争

や自然災害などの現場で人道支援活動を行う赤十字、国際機関、政府機関や大学、NGOなどの人材を対象とし、今回は、ウクライナ人道危機やトルコ・シリア地震の被災地で支援活動を行う赤十字・赤新月社スタッフなど12カ国から20人が参加。支援活動中に彼らが直面する問題を解決するために、必要な知識や公衆衛生などの基礎知識、倫理的行動規範を学ぶ場となりました。



参加した赤十字・赤新月社職員の感想



イリーナ・マルティニュークさん ウクライナ
赤十字社所属

ウクライナ人道危機をきっかけにウクライナ赤十字社で働き始め、適切な対応力と幅広い保健の知識を身につけたく参加しました。研修では、状況を客観的に分析すること、組織を横断して広く状況を把握することの大切さを学びました。今後は、人道対応計画の作成に参画しながら、所属する巡回診療チームの同僚にも学んだことを伝えていきたいです。



メルベ・アイ・クラビホオラルテさん トルコ
赤新月社所属

2月に起きた地震の被災者支援に加えて、研修で学んだ知識を将来の地震対応に生かし、緊急時の医療支援体制の発展に貢献したいです。トルコと同じく地震が多い日本の人々とは、私たちの痛みを分かち合えると感じています。



ヒンド・バクールさん シリア
赤新月社所属

災害など緊急事態への対応は、地域社会が主体的に取り組むことが重要です。地域医療に携わる身として、自らが知識を得ていくことが、医療部門全体の対応能力の向上につながると思い研修に参加しました。研修での学びを生かし、緊急対応に従事する人材の対応力を高めることにも取り組みたいです。

そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。
今回は「一人でも多くの命を救うためのトリアージ」です。

災害時における傷病者の治療は、緊急の対応を要するものから簡単な処置で済むものまでさまざまですが、医師や看護師、医療資器材などを始めとする限られた医療資源を効果的に活用するためには、治療の優先順位を決めて対応する必要があります。その優先順位を区分し、分かりやすく示す方法として取り入れられているのが「トリアージ(Triage)」です。トリアージは、「選別(優先割当)」を意味し、傷病者の状態が書き込まれた「トリアージタグ」を用いて、限られた医療資源の割当てを行うため、全ての医療機関に共通した記入項目となっています。トリアージ区分

は、軽症又は治療が不要な状態「区分Ⅲ(緑色)」、治療を要するが時間的な猶予がある状態「区分Ⅱ(黄色)」、重症で治療の優先順位が最も高い状態「区分Ⅰ(赤色)」、死亡や、蘇生の可能性が低く治療対象外の状態「区分0(黒色)」の4つの色に分けられます。トリアージは、被災地で一人でも多くの命を救うための重要な対応であるため、日赤救護班は迅速に行えるよう日々の訓練を重ねています。



トリアージタグ。優先順位を示す4色のタグを、傷病者の状態に基づき切り離して使用する

2 TOPICS

関東大震災から100年、「温故備震」企画展 天皇皇后両陛下、ご家族でご見学

陛下をご覧になった「温故備震」の資料は日赤WEBサイトでご覧いただけます。



両陛下と愛子さまは時折質問をしながら職員の説明に耳を傾けられた。ご一家の赤十字情報プラザへのご訪問は初めて

10月2日、天皇陛下と日赤名誉総裁である皇后陛下、長女の愛子さまが、日赤本社を訪問されました。ご一家は、到着後すぐに前庭の殉職救護員慰霊碑に花を手向けられた後、赤十字情報プラザで開催されている関東大震災100年の企画展「温故備震～故きを温ね明日に備える」を見学されました。お三方は、「大正12年関東大震災 日本赤十字社救護誌」に記された当時の東京・神奈川の救護機関配置図や、日赤所蔵の写真の前に、職員の説明に熱心に耳を傾けられま



資料を読み込まれるご一家。陛下は「このような資料が残っているのですね」と驚かれた様子



日赤に残されている、当時の東京、神奈川の救護機関配置図(写真は原本の拡大プリント)

した。両陛下は、海外支援金品リストに特に興味を示され、約30カ国もの国々から寄せられた支援に感銘を受けられたご様子でした。また、救護所の配置図をご覧になった皇后陛下と愛子さまが、「救護所は何カ所設けられたのですか?」と同

時に質問されるなど、100年前の日赤の救護活動に大きな関心を寄せられていました。

その後、同室内にある赤十字の歴史と活動を伝える常設展もご見学。皇太子時代に日赤名誉副総裁を30年務められた天皇陛下は、日赤初の災害救護活動である磐梯山噴火などのいくつかの資料については自ら皇后陛下と愛子さまに解説されました。また、愛子さまは赤十字の歴史を学ばれていたご様子で、救護用医薬品の展示コーナーでは、職員の説明よりも先に「アメリカからいただいたウイスキーもあるのですよね」と話される場面も。愛子さまの知識に驚く職員に「先走ってしまいました」とはにかむ、ほほ笑ましいお姿もありました。案内役を務めた赤十字情報プラザ・大西智子参事は「ご家族で交わされるお言葉から両陛下の赤十字に対する深いご理解と並々ならぬご関心が伝わってきました。愛子さまも熱心に資料をご覧くださり、感激いたしました」と、印象を語りました。情報プラザの見学後は、別室で特別に展示された災害救護用テントなど最新の日赤の救護資機材もご覧になりました。



ご案内役を務めた大西参事

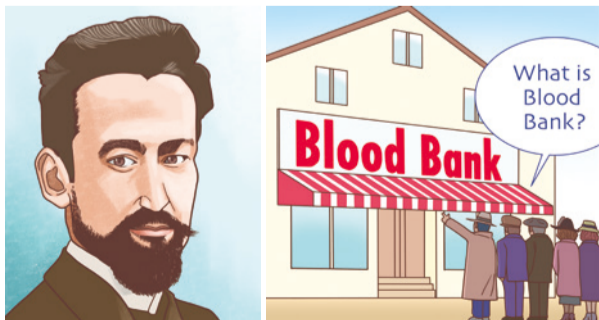
戦禍の負傷者を救う血液銀行「保存血液」の誕生

現在では当たり前となっている、輸血用の血液を一定期間保存しておく「保存血液」は、第二次世界大戦の前後に、その実現のための動きが活発になりました。

血液を保存する機関として、世界で最初に「Blood Bank(血液銀行)」が立ち上げられたのは1937年のアメリカ・シカゴ。移民であったバーナード・ファンタス医師が、郡病院の中で「Blood Preserving Laboratory(血液保存研究室)」と看板を掲げ、売血による保存血の製造を始めたのです。そこから「Blood Bank」へ改称すると、全米や欧州からも視察団が訪れるほど注目を集めました。数年後に同氏が亡くなり組織は一時衰退してしま

いました。その後、1939年に第二次世界大戦が始まり、イギリスでドイツ軍の空襲による多数の死傷者が出たことを受けて、「血液銀行を作って負傷者を救命しよう!」という声が市民の間で高まり、「保存血液」誕生のきっかけとなりました。この血液銀行を望む動きは、当時のイギリスの同盟国であったアメリカにも伝わり、アメリカ赤十字社が保存血液の作成に取り組みます。1943年には高性能の抗凝固剤ACD液が開発され、大戦中にアメリカ本

土で採血された血液は、約630万リットル以上となりました。この保存血液の一部は、戦争の前線に空輸され、多くの欧米の兵士の命を救います。一方で、日本では保存血液に関する情報がなく、前線の傷病兵のほとんどが、輸血を受けることができませんでした。



バーナード・ファンタス医師(左)と、改称して一気に注目を集めた「Blood Bank」(イメージ)

輸血にまつわるさまざまなエピソードを紹介する連載コーナー。今回は、「保存血液」の誕生について紹介していきます。

輸血の歴史やトリビアが満載!
輸血なるほどストーリー vol.4
監修 日本輸血・細胞治療学会名誉会員 高本滋先生

AREA NEWS

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。

神奈川

地震に備え、大規模防災訓練に赤十字救護班と奉仕団員が参加



9月1日、関東大震災から100年の節目の日。相模原市総合防災訓練が実施され、消防、警察、自衛隊および在日米陸軍など、146機関・団体が参加、日赤からは相模原赤十字病院の救護班1班6人と、無線救急赤十字奉仕団員2人が参加しました。

また、9月3日に多摩川河川敷の菅目広場で開催された川崎市総合防災訓練には、横浜市立みなと赤十字病院の救護班1班7人、救護赤十字奉仕団員2人が参加。それぞれの訓練において、日赤救護班は、地震により倒壊した建物や車両から救出された傷病者の観察と応急処置、トリアージなどを行いました。

千葉

JRCがベトナムと国際交流語学奉仕団のサポートも



8月21日、千葉県の青少年赤十字(JRC)のメンバーが、ベトナムとオンラインで国際交流を行いました。参加したのは、中学生、高校生それぞれ5人ずつの計10人。メンバーは、千葉県赤十字語学奉仕団のサポートのもと、夏休み

中に何度も練習を重ね、本番では日本の文化や赤十字の活動を英語でプレゼンテーションしました。おもてなしの心が伝わるよう、皆で協力して動画を撮影したり、ベトナムの国旗を手作りするなど、工夫にあふれた交流の機会となりました。交流後、メンバーからは「ベトナムの人の温かさを感じた」「もっと英語の勉強をして、伝えたいことをすぐに英語にできるようにになりたい」など、感想と抱負が聞かれました。

静岡

「海の豊かさを守ろう」SDGsの学びを生かしてJRCと奉仕団が海岸の清掃活動実施



9月10日、静岡県の青少年赤十字(JRC)高校生メンバー総勢141人が、牧之原市および沼津市赤十字奉仕団と協働し、さがらサンビーチと千本浜海岸の清掃活動を行いました。この活動は、日赤静岡県支部が実施するJRC高校生メンバー研修会の一環で、メンバーは事前に、SDGs目標のNo.14に掲げられる「海の豊かさを守ろう」などについて学習。

終了後、参加者からは「プラスチックやビニール類など多くのごみを集め、海岸をきれいにすることができ、充実感や達成感が得られた」「予想以上にプラスチックごみが多く、ごみの分別やリサイクルなど、ごみの削減に協力していきたい」となどの感想が寄せられ、気づきの多い清掃活動となりました。

栃木

少子化の社会で、赤十字ができること子育てサロンで幼児安全法講習



日赤栃木県支部では、県内の子育て支援拠点にて、子育てサロンに参加する親子および運営スタッフを対象に幼児安全法講習を実施。講習では、ママが行う心肺蘇生を4歳の幼児が隣でまねしたり、幼児と学童が飛び入りで参加して真剣に取り組んだり、子どもたちのほほ笑ましい姿も。県支部では、令和4年度から地域包括支援センターと連携し、健康生活支援講習の普及に励んでいます。今後は、少子化が進む社会で赤十字が寄与できることの一つとして、今回のような育児中の保護者および支援者への幼児安全法の普及も推進していきます。

岐阜

幼児期から学びはじめる防災50の幼稚園などに大型防災絵本を贈呈



日赤岐阜県支部では、県内の幼稚園、保育園、幼児園、こども園、計50施設に、「防災を学ぶ大型絵本」「じんだ!」(チャイルド本社)を贈呈しました。これは、幼児期からの防災教育の充実・強化を目的とした取り組みで、9月4日には、贈呈先を代表して北方町立こども園にて贈呈式を行いました。尾藤事務局長から本を手渡された園児からは「大切にします」などのお礼の言葉が。その後、実際に絵本を使った防災学習では、本を開くと横幅が1メートルにもなる迫力に大興奮。また、パーティーや段ボールベッドを使った避難所体験に参加すると、園児たちは「乗ったらつれちゃうよー」と心配しながらも段ボールベッドに乗り、その丈夫さに驚いた様子でした。

熊本

日赤の誕生を語り継ぐジェーンズ邸再オープン熊本地震からの復活



平成28年の熊本地震で倒壊した県指定重要文化財「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」が、移築再建を経て9月1日に再オープンしました。ジェーンズ邸は、西南戦争のさなか(1877年)、日本赤十字社の前身である博愛社が有栖川宮征討総督から設立許可を下された場所です。1932(昭和7)年から1968(昭和43)年までは、日赤熊本県支部および血液センターとして、また、一部は診療所としても使用されていました。再建記念式典には、清家篤日赤社長(写真右)も出席し、熊本地震発生の際に社長として救護活動の指揮をとった近衛忠輝名誉社長からの祝電も披露されるなど、関係者一同、復旧を喜び合いました。再オープンを記念して、来年の3月までは入館料が無料となっています。

常任理事会開催報告

令和5年10月19日、令和5年度第6回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、気候変動にかかる日本赤十字社の基本方針の策定について審議し、アフガニスタン地震とイスラエル・パレスチナ間の武力衝突への対応について報告しました。

⑦ 11月号読者アンケート 質問項目

- [A] 日赤の「会員」ですか
ア. 会員(年間2000円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) イ. 会員ではない
- [B] 赤十字の活動の中でよく知っている事業はどれですか
ア. 国内災害救護 イ. 国際活動 ウ. 赤十字病院
エ. 看護師等の教育 オ. 献血(血液事業)
カ. 救急法等の講習 キ. 青少年赤十字
ク. 赤十字ボランティア ク. 社会福祉
※上記選択からア～ケの文字をご記載ください。複数選択可
- [C] 今回、赤十字NEWSを読んで、赤十字の活動の中で理解が深まったのは上記ア～ケの事業のどれですか
※複数選択可
- [D] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま イ. A4サイズ
ウ. 小冊子(A5 148×210mm) サイズ
- [E] 現在の赤十字NEWSの読みやすさ
ア. 読みやすい イ. 読みにくい:その理由(文字が多い/少ない、レイアウトが悪い、写真が多い/少ない、ページ数が多い/少ない)
- [F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 イ. 2カ月に1回 ウ. 3カ月に1回
エ. 4カ月に1回
- [G] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望

赤十字は、動いてる!

今、危機に瀕している1億人の命をつなぐために。



NHK 海外たすけあい

今、危機に瀕している1億人の命をつなぐために

キャンペーン期間:12月1日(金)～12月25日(月)

ウクライナやシリアだけではなく、今、世界中で1億人以上の人々が紛争などから避難し、危機的な状況にさらされています。これらの人々の命と健康、尊厳を守るために、赤十字は365日支援活動を続けています。

「NHK海外たすけあい」は、日赤とNHKが毎年12月に実施している、今年で41回目を迎える募金キャンペーンです。この活動では、「必要な人に、必要な支援を」という理念を掲げ、対象を絞らずに幅広く行き届く支援を行っています。

たとえ社会の関心が薄れてしまった人道危機であっても、誰一人取り残さないために、みなさまのご支援をよろしくお願いいたします。

あなたのご寄付でできること

2000円

安全な水 2ℓ×40本



不衛生な環境下で暮らす人びとに飲料水、生活や医療で使用する水を届けます。

5000円

給食 30人分



おなかを満たせない子どもたちへ支援を行います。

Present!!



A賞 日赤の防災ノウハウが詰まった厳選16点セット! 日赤の車載用防災セット

3名様

災害は、家や会社にいるときだけでなく、移動中にも起こるかもしれません。もし、車の運転中に発災し、長時間を車で過ごすことになってしまったら…。そんな緊急事態に備えて開発されたのが「日赤の車載用防災セット」です。車に載せておきやすいコンパクトなボックスの中に、水や食料、非常用トイレはもちろん、緊急脱出用ハンマー、救急セット、保温シートなど、さまざまな事態を想定した厳選16点の防災アイテムが収められています。



B賞 赤十字の「人に寄り添う活動」を身近に感じる 2024年版 赤十字手帳&赤十字カレンダー



赤十字カレンダー 2024年版 (B3壁掛け、13枚つづり) (税込み990円・送料別)
赤十字手帳 2024年版 (約15cm×9cm、赤白リバーシブルカバー、別冊赤十字便箋付き) (税込み390円・送料別)

日赤サービス オンラインショップ

ハートラちゃんやサンリオキャラクターとコラボした新商品も随時発売中!

※画像はイメージです
【お問い合わせ】(株)日赤サービス
TEL:03-3437-7516



「NHK海外たすけあい」について詳しくは ▶ 日赤 海外たすけあい

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。

①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS11月号を手に入れた場所

(例/献血ルーム) ⑥希望賞品(A/B) ⑦11月号読者アンケートの回答(質問項目は右上の赤枠内)

※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS11月号プレゼント係

WEB応募/右の2次元コードからご応募ください。

11月30日(木) 必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代させていただきます





モロッコ王国とリビアってどんなところ？

モロッコ王国

アフリカ大陸の北西端に位置し、北大西洋と地中海に沿って国土が広がる。人口は約3700万人。1960年にも大地震が発生しているが、今回の地震はそれ以来最大の被害状況となっている。

リビア

北アフリカに位置し、人口は約680万人。国土の大半が砂漠で、北側の地中海に面した地域に都市部が集まる。今回の洪水では、東部にある人口12万人の都市デルナを始め、広範囲で甚大な被害が発生した。

モロッコ、リビアを立て続けに襲った大規模災害

9月8日、北アフリカのモロッコでマグニチュード6.8の地震が発生。また9月10日には、巨大なハリケーンが同じく北アフリカのリビアを襲い、同国東部で大規模な洪水が発生しました。今回はこの2つの地域の現状と、現地赤新月社と国際赤十字がこれらの災害に対してどのような支援を行っているのかについて、レポートします。

モロッコからのレポート

**標高の高い被災地を襲う厳しい寒さ
適切な避難場所・環境を
提供するための支援に注力**

9月8日、北アフリカのモロッコでマグニチュード6.8の地震が発生しました。今回の震災による被害は甚大で、約3000人が命を落とし、数千人が負傷、倒壊・損壊した建物の数は5万6000棟を超えたとされています(10月6日時点、モロッコ政府発表)。地震発生直後には、余震による家屋の倒壊を恐れ、被災した人々が野外で過ごす姿も見られた中、モロッコ赤新月社は直ちに救護チームを出動させ、住民たちへの応急手当を開始。これまで、必要な物資の配布からこころのケアの実施など幅広い支援を続けてきました。

発災から1カ月以上がたち、被災地で懸念される新たな脅威は、来たる冬の厳しい寒さです。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)のグウェン・イマー氏は「地震により何千もの家族が壊滅的な被害を受け、非常に過酷な状況にさらされています。そんな中、震源地付近のアトラス山脈では冬が近づいていて、支援ニーズは計り知れないほど膨大です。対応は一刻を争います。私たちは、断熱の避難所や、冬に向けた必需品を提供するため、懸命な活動を続けています」と話します。被災地は標高1500～2000メートルと非常に高い地域もあり、簡易的な避難所に過ごす人々にとって、特に寒さは厳しいです。モロッコ赤新月社は、喫緊の課題である適切な避難場所、食事・水・必需品の提供、また、シャワーやト

イレなどの衛生環境の整備に注力し、国際赤十字とともに支援を続けています。



被害が大きい地域の一つ、シシャワ州。ほぼ全て壊滅状況にあり、数百人もの命が失われた

リビアからのレポート

暴風雨とダム決壊による未曾有の大洪水。寸断された地域で懸命な支援を継続

9月10日、巨大なハリケーンが北アフリカのリビアを襲い、暴風雨によるダムの決壊で、同国東部で大規模な洪水が発生しました。多くの建物が損壊し、インフラや交通の断絶などの障害が重なり、被災地域は著しく困難な状況に置かれています。

今回のハリケーンと大洪水による被害として、これまでに4000人以上が亡くなり、8540人が行方不明(9月23日時点、WHO発表)、4万3000人以上が避難(9月20日時点、国際移住機関発表)したとされていますが、まだ被害の全容は明らかになっていません。大雨により複数の都市が冠水したことに加え、同国沿岸都市のデルナでは2つのダムが深夜に決壊して、河川の近隣の建物を海へ押し流し、多くの犠牲者が発生しました。

リビア赤新月社では、災害発生直後から

継続して行方不明者の捜索活動を続けました。災害から1カ月経過した現在も、一部の地域では道路が寸断、電気やインターネットなどの通信も切断されており、ボランティアの安全確保など、人道支援の前に立ちほだかる問題が山積んでいます。

中でも懸念されるのは被災者および支援活動に携わるボランティアのこころの健康。

これまで多くの災害対応を経験してきたボランティアは、雨が降ると家の中に入り真っ先にドアを閉めます。リビア赤新月社でこころのケアを担当するアリ・ガロールさんは「人々は雨を死と結びつけて考えるようになりました。ボランティアも含め、多くの人々が心理的なサポートが必要です」と語ります。このような中でも、被災者のニーズをくみ取りながら、懸命に支援を続けていきます。

日赤は、モロッコ、リビアにおける赤十字の活動を支援するために、海外救援金を募集しています。みなさまから寄せられた救援金のもと、モロッコ地震の対応へ1億2000万円(IFRCに送金)、リビア洪水の対応へ6000万円(IFRC・ICRC*に各3000万円送金)の緊急資金援助を実施しました。

引き続き、みなさまのご協力をお願いいたします。



リビア赤新月社職員とボランティアは被災地へ赴き、人々を避難させたほか、捜索救助活動に尽力
*赤十字国際委員会

モロッコ、リビアのほか、アフガニスタンの被災地やイスラエル・ガザ人道危機などで苦しむ人々を支援
海外救援金*受け付け中!

海外救援金の情報、
赤十字の支援の報告など、
詳しくはこちら▶



*各国の状況に応じて現地赤十字社・赤新月社や国際赤十字が行う救援・復興支援活動、防災・減災活動などに充てられます。